

## 1. テーマ

- ・植民地の独立を主張したホセ・リサールは国民観、祖国観をどのようにイメージしていたのか。
- ・リサールの祖国観・国民観を、リサールの思索の現場において、彼が生きた歴史と人生の現実に即して理解する。
- ・しかし『ノリ・メ・タンヘレ』出版時までの初期リサールの祖国観、国民観のみを扱ったものである。

## 2. データ

- ・リサールの曾祖父の代からリサールが生まれるまでの簡単な背景。
- ・リサールの足跡。
- ・リサールの文学作品。
- ・リサールと兄の手紙のやり取り。
- ・フィリピン人コミュニティの年越し晩餐会でのリサールの乾杯の祝辞。

## 3. 方法

- ・2で挙げたリサールの文学作品、手紙や祝辞、そのときのリサールの歴史的状況を組み合わせて考える。
- ・歴史の襞に入り込むことによって見えてくる、時代の想像力や思想のダイナミックスから理解する。

## 4. 結論

- ・リサールの祖国観、国民観は血の論理で決められるものではなく、人々の感性や道徳的立場、政治的立場などによって決められる。
- ・人種のるつぼとも言うべき開かれた海洋社会では本来このようなものでしかありえなかった。
- ・ただしこの論文で考察した期間はあくまでリサールが26歳のときまでの祖国観、国民観である。

この論文での注目すべき点は、リサールの初期の祖国観、国民観のイメージを明らかにするためにリサールの詩作や発言、手紙などから時代の想像力や思想のダイナミックスを通してリサールの祖国観、国民観を理解しようとしていることである。著者は、リサールが構築した思想や概念を検討するさい、これまでの研究がリサールの歴史と人生の現実に即して理解することを軽視してきたことを指摘している。そこでこれまでにとられてこなかったこういった方法で、リサールの国民観、祖国観に迫っているのである。

またこの論文で池端は『ノリ・メ・タンヘレ』以降のリサールの祖国観、国民観は稿を改める、としている。つまりこの論文ではリサールの後半の思想について述べられてはいないわけであるが、前半の思想だけではリサールの考えに関して誤解を招くこともあるかもしれない。そこで池端はこの論文の最後にリサールの死の前日の詩、『最後の別れ』を載せているのではないだろうか。つまり、死の前夜に書かれたこの詩はリサールが最後に抱いていた祖国観、国民観が現れていると考えることができる。それを最後に紹介することで、この論文では扱えなかったことを表現しようとし、また同時に著者自身の課題を提示していると思われる。